

「経験の透明性」は経験の現象性と志向性の関係について何を示しているのか
小草 泰（大阪市立大学）

「知覚経験の現象的で質的な側面——「現象的性格」——は、知覚経験の志向的内容に尽くされる（還元される）のか否か」という問いを巡る論争が、知覚の哲学の中で中心的な位置を占めている。そしてこの論争において鍵を握ると考えられているのが、「経験の透明性」と呼ばれる論点である。大ざっぱに言うと、それは「青色を見るという経験の性質に注意を向けようとするときにわれわれが気づくのは、経験されている対象の青色という性質だ」という、現象的観察（反省）に基づくテーゼである。一方で（マイケル・タイを代表とする）表象主義者は、透明性を主たる根拠として、「現象的性格は志向的内容に尽くされる」と主張し、他方（ネッド・ブロックら）クオリア論者は、透明性に一定の正しさを認めつつも、「経験には、非志向的で純粋に質的な現象的特徴——クオリア——があるのだ」と主張する。一人称的視点からの現象学的観察はふつう心的なものの還元にとって障害になると考えられそうなものだから、もしそのような観察から得られる透明性が実は志向性による現象的性格の還元を後押しするのだとしたら、そのことは還元主義的な立場にとってきわめて有利に働くであろう。

しかし、もっぱら「意識の現象的性格は、志向性によって還元できるかどうか」を焦点とする——言い換えると、志向性に関する物理主義的な見方を前提とした上で、現象的性格がそのうちに（どう）収まるかを問題にする——このような論争の枠組みは問題を抱えていると考えられる。その中では、知覚経験の志向性と、そしてまた知覚によって表象される（色などの）性質の本性に関する見込みのある見解が十分に考慮されておらず、またそれに伴って、「経験の透明性」とは正確に言って何であり、それがどんな議論を介してどのような見解を後押しするのかということが正確に理解されないままになっていると考えられるからである。本発表では、このような観点から、まず、[1] 表象主義とクオリア説の二項対立を中心とする現在の論争状況について反省し、現象的性格と志向性の関係に関するより適切な議論の枠組みを提示する。そしてその結果を踏まえて、[2] 透明性とそれに基づく表象主義者の議論を改めて検討し、透明性に含まれる正しさとは何であり、それは経験の現象的性格と志向性の関係についてほんとうのところ何を示唆するものであるかを明らかにすることを目指す。